



年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

B級な本の話、あれこれ
 作・文・絵・画・原作・訳・...

「本のはなし」と見出しを付けると、「いまさらなにさ」などという声が大向こうから聞こえるのですが、これはあくまでもB級な本の話なのです。いわばどうでも良い話(書いてる本人はけっこう真剣なんです)なのです。しかし、B級グルメが好きな人がいるように、人によっては面白いと感じてくれるかもしれません。ぼくとしては、そこに期待しています。

本には一番最後に奥付という部分がありますね。ここにはその本の書誌情報が表されています。何時出版されたとか、どこが出版したかとか、その本が何版であるかとか・・・、いわば、その本のお話来歴みたいなものが記されています。

この情報が必要とする人たちがいます。まずは図書館司書です。利用者のレファレンスのために欠くことができません。古本屋にとっても、必要な情報が載っています。マニアックな読者もご覧になるでしょう。

でも、奥付から本を見ていく人はいません。人は本のどこを最初に見るかと言えば、表紙や背表紙です。そこには必ずその本のタイトルと書いた人の名前が記されています。ぼくはこの書いた人の表し方に今回注目してみました。

これがあんがい曖昧な部分があるのです。以前

から思っていたのですが、本を書いたひと(一般的には「作者」「著者」です)を表す言葉だつて、さまざまです。一番多いのは作著××というものです。一般書では最近、×××という名前だけのものが圧倒的に多いようです。でも奥付には著や、作×××と記されています。

「絵本」の場合

ぼくが絵本で一番解りやすいと思うのは 文・××× 絵・ という表し方です。ところがこれが一定していません。以下具体的な例を見ていきましょう。

『しばてん』(えとぶん たしませいぞう 偕成社)とあります。これは絵も文も田島征三さんが一人で書いたということがすぐ解ります。つぎは『はるかぜのホネホネさん』(にしむらあつこ さく・え 福音館書店)というものがあります。これも西村温子さんが、文と絵を一人で描いたものだとわかります。しかし、文ではなく作になつています。『だるまちゃんといこくちゃん』(加古里子・さく 福音館書店)この絵本では作だけです。でも加古さんが両方書いていることは誰でも解ります。

ちよつとおもしろいのは『かさ』(作・絵 太田大八 文研出版)です。これも太田さん一人の手です。ところがこの絵本は文字無し絵本で、

絵だけで物語られて(それがこの絵本の場合とても良いのですが)いるのです。それをあえて作・絵と表したことに何か意味があるのでしょうか？

それではこんなのはどうでしょうか『あかいふうせん』(イエラ・マリ・作 ほるぷ出版)これは代表的な文字無し絵本の傑作ですね。しかも翻訳絵本です。

これには訳者が表示されていません。文字無し絵本だから訳者はいらない?ではタイトルの「あかいふうせん」と誰が訳したのでしょうか?イエラ・マリさんはイタリア人で、これはイタリアの絵本です。この「あかいふうせん」は原題を直訳したものでしょうか?日本で創られた本ですから和書です。編集者が訳したのかしら?曖昧ですね。

翻訳絵本については後半部分で改めて取りあげます。

「文」「作」の違いって何?

さて、つぎは文と絵を別々のひとが書いている場合を見てみましょう。

まずは、『ぐりとぐら』(福音館書店)の場合はどうなっているのでしょうか?表紙には「ぐりとぐら」とタイトルがあり、下の方には、「なかがわりえこ」とおおむらゆりこ」とあります。云わずと知れたこの絵本の作者お二人の名前ですね。

しかし、この絵本を初めて手に取ったひとは、どちらが文を書いた人でどちらが絵を描いたかはすぐには解りません。この絵

本の奥付を見れば中川李枝子 さく 大村百合子 え と記してあります。ここで初めて、中川李枝子さんが文で、大村百合子さんが絵を描いたことが解ります。

『はけたよ はけたよ』(ぶん・かんざわとしこ え・にしまさかやこ 偕成社)これは明確でわかりやすいですね。ぼくはこの表記方法が一番好きです。

ではこれはどうですか。『おふるだいき』(松岡享子・作 林明子・絵)この場合文を書いたひとは松岡享子さんで、絵は林明子さんだとすぐ解ります。しかし、この絵本では「文」ではなく「作」となっています。ぼくには、文と表す場合と作と表す場合のちがいが理解できません。

この違いは編集者の趣味の問題ですか?それとも作者の好みですか?はたまた、出版社によって「作」を使うところと「文」を使うところにわかれているのでしょうか?そうではないのですか。同じ出版社でも「作」と「文」と両方あります。そもそも基準はあるのでしょうか?

では本のジャンルによって使い分けているのでしょうか?これは多少はあるようです。科学絵本などのノンフィクションの場合は文

絵・ という具合に「文」という表現が多いようです。物語の絵本の場合は文と作と両方あるのですが、使い分けの基準ははっきりしません。

それとも、これはあくまでも想像ですが、文と絵を書いた人が別の場合、テキスト

(文)が先にできて、後で絵描きさんが絵を付けた場合、作 絵××とし、絵が先に生まれて文が後の場合は文 絵 とするのでしょうか?解りません!

「絵」と「画」の使い分けは?

今度は「絵」についてです。

絵本において絵の占める比重はとも大きいですね。『がたごとがたごと』(文・内田麟太郎 絵・西村繁男 童心社)というように「絵」という表現が一番多いようです。ところが、『ももたろう』(松居直・文 赤羽末吉・画)とあります。「絵」でなく「画」なのです。

この画という表し方は物語などの単行本の場合の挿し絵に画・×××と表されることが多いのは承知していますが、絵本の場合に「画」を使うのは少ないようです。

赤羽さんは画が多いようですが、調べてみますと、福音館の場合は少し前の絵本は「画」とすることが多かったようです。時代とともに少し変化するようです。時代とともに変化するのはいいのですが、

読者の側に意味が伝わらなのは困ります。

こんなのはどう思いますか?『みんなおなじ』でも『みんなちがう』(奥井一満・文 得能通弘・写真 小西啓介・AD 福音館書店)この絵本は左ページに「みんなおなじ」と文があり、右ページには「でも

みんなちがう」と文があります。

この絵本はこれのくりかえしですすんでいきます。例えば「ソラマメ」の写真が見開き画面一杯並べられています。小さまざまな大きさの空豆があり、またさやの中の豆も数がいろいろです。

種類は同じだけど、それぞれ個性のちがいのおもしろさがテーマになっている絵本です。ぼくはこの絵本が好きですが、理解できないことがあるのです。と言うより腹立たしく思うのです。

それは、奥井一満・文 得能通弘・写真 ここまで解るのですが、次の 小西啓介・AD とあるのですが、「この「AD」とはいったい何なんだ？」

そりゃー、ぼくは田舎の子どもの本屋の親父だから「今風」でないことは自覚していますよ。それに、言葉は時代とともに少しずつ変化するものであることも認めます。ただ、「AD」と表された場合、いったい何人のひとが「AD」ってなんであるか理解できるのでしょっか？ましてや、これは「子どもの本なんだぜ！」

もし子どもから「ADって何？」と聞かれたとき、貴方はこたえられますか？答えられないばくは、やっぱりもの知らずの田舎者なのかも知れませんか。

翻訳絵本はどうなってるの？

さて、子どもの本も翻訳本がたくさん出ています。こちらはどうなっているか、見てみましょう。

外国の本の場合、著者名と必ずその本を翻訳した訳者名が記されています。『クマのプーさん』(V・V・ミルン作 石井桃子・訳 岩波書店)という具合です。あれ？と、おもいませんか。そうなんです、『クマのプーさん』と言えば、シェパードさんのすばらしい挿し絵ぬきには考えられませんが、今でも毎年出るシェパードさんの絵の「プーさん」カレンダーはとても人気がありますもの。

では挿し絵画家の名前は何処にあるか、ページを繰って探していくと、目次の後にさし絵 M・E・シェパード とありました。

子どもの本の表紙には作者と訳者、そして挿し絵を描いた人が一緒に記されていると思っていたのですが、岩波書店は違いうようです。

そこで、『クマのプーさん』は随分前に翻訳された関係でこうなっているのかと思つて、最近の岩波の子どもの本の単行本を見ってみました。

『川べのちいさなモグラ紳士』(フィリパ・ピアス・作 猪熊葉子・訳 岩波書店)これは2005年に出版された本ですが、やはり表紙には挿し絵を描いたひとの名前は載っていません。ページを繰ると『クマのプーさん』と同じで、目次の後に「さし絵 パトリック・ベンソンとあります。大人の小説と違って、子どもの本は挿し絵の果たす役割は大きいと思うのです。ですから、情報として、表紙に記載する方が親切だと思います。

他の出版社ではどうかというと、『大草原の小さな家』(ローラ・インガルス・ワイルダー・作 ガース・ウィリアムズ・画 恩地三保子・訳 福音館書店)と表紙に表記されています。岩波書店は意外に保守的なのもかもしれません。

読者にとっては、表紙(背表紙も含めて)から得る情報はとても大切です。次に翻訳絵本を見てみましょう。

『ちいさいおうち』(ばーじにあ・リー・ばーとん ぶんとえい いしいもこ やく 岩波書店) 『かいじゅうたちのいるところ』(モーリス・センダック・作 じんぐうてるお・やく 葺山房) などとあります。

この2冊は文も絵も一人で創作した絵本ですが、日本の絵本と違い訳者の名前が記されています。

『はなをくんくん』(ルース・クラウス・文 マーク・シーモント・絵 きじまはじめ・訳 福音館書店)

というように、文と絵を描いた人がちがついていても翻訳絵本は訳者の名前が加わるだけです。いずれも書誌情報としてはよく理解できます。

これは大いに問題だ！

ところで、福音館から新しく出た『どくはなくて』(く・ピアンキ・原作 田中友子・文 Z・チャルーシナ・絵)この絵本は、どうしても理解できません。これはいったいどうしたことでしょうか？

ピアノキ・文 田中友子・訳 チャルシー・絵なら問題なく理解できるのですが、原作がピアノキとありますから、元はピアノキの話なのですね。つぎが問題です。訳でなく文・田中友子となっているのです。これは田中友子さんという人がピアノキの物語を元にして、昔話のように再話あるいは再創造したと解釈したらよいのでしょうか？それとも翻案や抄訳したということなのでしょう？訳としかなかったのは、なんらかの恣意的なものを含むことを曖昧に表現したのでしょうか？

もしそうであるならば、ぼくはそれは許されるべきではないと思います。

と言うのは、この本の奥付を見ると、NDC (日本十進分類法) 480となつています。480は動物学です。いわば科学的内容を含んでいることです。

奥付のページの田中友子さんの紹介を読んでも動物学の専門家でもないようです。

許されない訳(?)の恣意性

一方「原作」のピアノキはロシアのナチュラリストであり、動物学者です。そのピアノキの書いたものを田中さんは恣意的に内容を変えてしまったのでしょうか？

原作がどんな内容か解りませんからこれ以上は書けません、訳ではなく文としたことは、ある意味で読者を軽視した行為で

はなのでしょうか。原作者のピアノキ氏にも失礼です。

絵本ではありませんが、手元に『クオレ物語』(原作・アミーチス 池田宣政 講談社)という本があります。これは世界名作全集というシリーズの中の一冊です。

11刷で、昭和29年に出版された本です。この本の前書きにはこれを書いた池田氏が丁寧な解りやすく、翻案であることを説明しています。さらに、後の作品解説で那須辰造氏が完訳本として岩波文庫と三笠書房から『クオレ』がでていることを知らせています。

この本は、今から50年近く前に出版された子ども本ですよ。なのにこれだけ親切に翻案したことを読者に説明しています。これこそが、この翻案の「クオレ」を出した出版社と書いた人の読者に対する態度というものではないでしょうか。

これが、約50年前の子どもの本に翻案や抄訳が多かった時代のものです。

ところがどうでしょうか、この絵本には原作ピアノキとはありますが、「文」田中友子としたことの説明が何処にも書かれていないのです。

ぼくが思うに絵本にしたくらいですから、原作は短い話で、おそらくこの絵本は完訳に近いが、完訳そのものではないのでしょうか。でも「訳」でなく「文」とは、これ如何に？福音館書店さま！

今回のB級本の話はこの辺で終わります。本のB級話とはときおり書いていきたいと思えます。

編集後記

安部首相はなにか勘違いをしているのではないだろうか。「私の内閣」と言う言葉をことあるごとに連発しているが、聞かされるこちらは聞き苦しくてたまらない。おもわず「おい、政府はお前個人のものか？」と言ってみたくもなる。おそらくは、こう言っているときには「主権在民」というこの国の根幹(憲法)をなす考え方など、彼の頭のなかには欠片もないのだろう。多数をバツクに教育基本法を改悪し、さらに憲法の改悪をもくろんでいる。智慧の浅い者を最高権力者にいただいている、この国の不幸を憂慮せずにはいられない。ぼくは安部氏に次の詩を贈ろう！

わたしが子どもであったころ
わたしは智慧を持っていた
それはずいぶん前のこと
それから毎日 日が過ぎて
ただどかしくなりやしない
これからどんなに生きてとしても
もし 死ぬ時になったとしても
わたしはかしくはならないだろう
長く生きれば生きるほど
時が過ぎれば過ぎるだけ
わたしは馬鹿になってゆく

マザーグース 岸田理生・訳(新書館)
自覚せよ。安部晋三！ 憲法改悪絶対反対！